

『北越雪譜』

越後の雪の随筆。越後魚沼郡塩沢の縮商鈴木牧之(すずきぼくし)の著。牧之は、明和7(1770)年の生まれ。20代の終わりには、この雪の書の出版を計画し、山東京伝、滝沢馬琴、『絵本太閤記』の作者として有名な岡田玉山らに協力を依頼するが、出版の見通しは立たなかった。牧之が49歳の年に再び滝沢馬琴に依頼をする。馬琴は引き受けたものの、『南総里見八犬伝』などの仕事に忙しく、なかなか進まなかった。天保元年、牧之61歳の時に、山東京伝の弟である山東京山から出版の申し出があった。こうして、牧之の原画をもとに、京山の息子京水が挿絵を描き、実に40年の構想を経て、天保7(1836年、牧之67歳の年に初編は出版された。豪雪地住民の生活の哀歓を描いた最初の刊本として好評を受け、牧之は中風にかかった不自由な体で二編の執筆を続けた。さらに三編、四編と続ける意欲はあったようだが、二編の出版された天保12年の翌年に73歳の生涯を終えている。

初編3冊、二編4冊。魚沼地方を中心に雪国越後の地勢・気象・行事・産物・歴史・民俗・人物・伝説などを随筆風に叙述。特に越後縮・鮭捕り・雪具、また雪中の行事などの記述は詳細。版元文溪堂は補訂をしながら版を重ね、明治以降、版木を引き継いで万笈閣・寛裕舎・雁金屋・山口屋などがつぎつぎに出版。昭和11年(1936)『岩波文庫』に収められて、一般に広く読まれるようになった。本学所蔵の『北越雪譜』は明治20年(1887)前後刊行の和装本。

[参考文献]

北越雪譜：現代語訳 / 鈴木牧之 [著]；荒木常能訳：野島出版，1996.11

914.5/41 0097100382

北越雪譜 / 鈴木牧之編撰；京山人百樹刪定；岡田武松校訂 岩波書店，1982.6 914.5/30 0082105966

校註北越雪譜 / 鈴木牧之 [著]；井上慶隆，高橋実校註：野島出版，1979

914.5/24 0080100049

“ほくえつせふ【北越雪譜】”，国史大辞典，JapanKnowledge，<http://japanknowledge.com>，

(参照 2014-10-14)

北越雪譜①

関山という村には、魚野川を渡る橋がある。雪の降るころには、一夜のうちに三尺も五尺も積もることがあり、橋の幅の狭い上に雪が積もったところを渡るので、渡り慣れた者でも過って川に落ちて溺死することが時々ある。

さて、この村に源教という六十あまりの僧が一人で草庵に住んでいた。念仏三昧の僧として知られ、二夜に一度は例の橋に立って、溺れ死んだ者に対して回向をしていた。寒念仏の満願の夜に念仏を唱えていると、こうこうと輝いていた月がにわかに曇って、川の中から青い火がひらひらと燃え上ってきた。これは亡者の陰火に違いないと目を閉じて鉦を鳴らし念仏を唱えていた。目を開けてみると、橋の上の三間ばかり向こうに、青ざめた顔に黒い髪が乱れかかっている三十歳あまりと思われる女が、今水から上がったばかりのように濡れた着物の袖をかきあわせて立っていた。暗い闇の中にありありと形が見えるのはこの世のものではない。体が透き通っているのか、後ろにあるものが微かに見える。腰から下はあるのかないのかぼうっとしている。

「私は古志郡のある村のもので、菊というものです。夫も子も亡くなったため一人になってしまいました。近くに住む縁のある者を尋ねていく途中、道を踏み外して水に落ち、溺れ死にました。今夜は四十九日の逮夜（葬儀、忌日の前夜）なのですが、手向けてくれる人もありません。それでも、ご坊が度々ここにきて回向してくださいましたので、その功德で成仏できるようになりました。しかし、髪の毛が邪魔になってまだこうしてさまよっているのです。この上はどうか、この髪を剃ってはいただけませんか。」

といって袖で顔を覆って泣いている。源教が、「それは簡単なことです。しかし今は剃刀を持っていないので、明日の夜私が住んでいる関谷の庵に来なさい」そう言うと、幽霊はうれしそうにうなずき、煙のように消えた。

次の日、源教はいつもより念を入れて仏の供養をし、庵の中を掃除してお経を読んでいた。...降る雪は雪簾にあたり、サラサラと音がしている。一軒家のことでもあり、辺りはしんと鎮まりかえっている。しばらく時が過ぎたが、幽霊の姿も見えず、炉のあたたかさから居眠りしたと見え、ぐらりとしてはっと目を開けた。いつ来たのか、お菊の幽霊が薦（こも）に座り、仏壇に向かって頭を下げていた。さすがに源教もぞっとしたが、心を落ち着けて「よくぞおいでなされた」と声をかけた。幽霊は黙っていたが、姿は昨夜と変わらなかった。源教は手を洗い、たらいに水をくみ、剃刀を持って幽霊のそばに立った。見ると、髪は露に濡れたように濡れ、しかし、雪の降る中を来たようにも見えない。この髪の毛を残しておいて、後々の証拠にしようと思い、そのつもりで剃刀を使ったが、剃り落すあとから、糸で引かれるように幽霊の懐に入っていく。そうこうするうちに剃り終ったが、わずかばかりの毛をやっとの思いで残すことができた。幽霊は白い痩せた手を合わせて、仏壇を拝みつつ次第に姿を薄くして消えてしまった。...これは一昔前の出来事であるが、この髪の毛を埋めて石塔を建てた関山の毛塚は今も残っている。

[参考文献]

北越雪譜：現代語訳 / 鈴木牧之 [著]；荒木常能訳：野島出版，1996.11

914.5/41 0097100382 p. 145-147より引用、一部要約

北越雪譜②

魚沼郡雲洞村にある雲洞庵は、越後の四大寺の一つある。一国の大寺だから、古文書や宝物なども多い。その中に火車落としの袈裟というのがある。香染の麻のように見えるが、血のあとがある。これを火車落としといって宝物にするのはいわれがある。

天正のころの雲洞庵は、学問に優れ、徳が高く、尊者といわれる十世北高和尚が勤めていた。この寺に近い村の農家で死亡したものがいたが、冬の雪が降り続いているときで吹雪が止まなかった。三、四日は晴れを待っていたが、降りやまなかったので無理に葬式をすることになった。北高和尚を迎えて棺を出し、親戚やその他の人々は蓑や笠を着けて棺を送っていた。雪道の半ばに来たとき急に猛烈な風が吹きはじめ、黒雲が空一面に広がり、闇夜のようになった。そのとき、どこからともなく火の玉が棺を目がけて飛んできて、覆いかぶさった。火の中には尾が二股になった大猫がいて、牙を鳴らし、鼻息も荒く、棺を奪い取ろうとした。人々はこれを見て棺を捨て、ころがりながら逃げていく。北高和尚は恐れる様子もなく口に呪文を唱え、大声で一喝し、鉄の如意でとびかかってきた大猫の頭を撃った。大猫の頭からは血がほとばしって、衣を汚したが、この化け物はそのまま逃げ去ったのである。

そして、風も止み雪も晴れて葬式も無事に営むことができた、と寺の古い記録に残っている。このとき着ていた衣を火車落としの法衣といって、今に伝わっているのである。

[参考文献]

北越雪譜：現代語訳 / 鈴木牧之 [著]；荒木常能訳：野島出版，1996.11
914.5/41 0097100382 p. 274-275より引用、一部要約

北越雪譜③

魚沼郡堀ノ内から十日町へ越える道は七里あまりある。村々もあるのだが、山中の道を入らなければならない。

十日町のある縮問屋が堀之内の問屋に、白縮を何反か急いで送るようにといってきたので、その日の昼過ぎ、竹助という気丈な男を選び、荷物をかつがせて送り出した。こうして道も半分くらい来たころ、竹助は道の脇にある石に腰掛け焼飯を食べていたが、そのとき谷間から笹を押し分けて来るものがある。近くに来たところを見ると猿に似ているが猿ではない。頭の毛が長く背中に垂れており、半ばは白くなっている。背丈は並みの人に比べて高く、顔は猿に似てはいるが赤くはない。目は大きく、鋭い。竹助は気丈な者なので、用心に差している山刀を手にとり、近くに寄ってきたら切ろうと身構えていたが、この者はそうしたようすもなく、石の上においてある竹助の焼飯を指して欲しそうにしている。竹助はそうだったのかと投げてやると、うれしそうに食べた。これで竹助も心を許し、また与えたところ、近くに寄って食べていた。

竹助は「私は堀之内から十日町へ行くものだ。明日もこの道を通して帰る。また焼飯を与えよう。急いでいるから、これで行くぞ」といって、おろしてある荷物を担ごうとしたところ、この者は荷物を軽々と持ち、肩にかけて先に行く。竹助は、焼飯の礼に力を貸してくれるのだらうと、後についていったが、その者は重い荷物を肩に背負っていると感じないように歩いていた。険しい山道もこのため簡単に通ることができ、一里半の山道を越えて池谷村に近くなった時、荷物を降ろして山へ駆け登っていった。その早いことは風のようにだったと、竹助は十日町の問屋で詳しく語ったという。今から四、五十年前のことと聞く。そのころは、山仕事する人たちは、時々この異獣を見たということである。

これを考えてみたが、『和漢三才図会』寓類の部に、飛驒国、美濃国、また西国の深山にもこのような異獣のいることを記してある。だとすれば、どこの深山にもいるものであろう。

[参考文献]

北越雪譜：現代語訳 / 鈴木牧之 [著]；荒木常能訳：野島出版，1996.11
914.5/41 0097100382 p. 295-299より引用、一部要約